

令和4年5月25日

厚生労働大臣

後藤茂之 殿

令和5年度予算概算要求に関する要望

四病院団体協議会

一般社団法人 日本病院会

会長 相澤 孝夫

公益社団法人 全日本病院協会

会長 猪口 雄二

一般社団法人 日本医療法人協会

会長 加納 繁照

公益社団法人 日本精神科病院協会

会長 山崎 學

令和2年の年初から世界的に急速拡大した新型コロナウイルス感染症は、新たな変異株の発生によって今もなお感染拡大が続いている地域が多くあります。わが国においても、政府による度重なる緊急事態宣言の発令にも拘わらず、感染の制御は困難を極め、医療現場は大きな混乱の中にあります。そして、新たな感染症の収束は未だ先が見通せず、更なる感染の拡大も懸念されます。

一方、急速な減速を余儀なくされた世界経済が、欧米を中心に回復基調を見せるなかで、わが国ではその感染状況から、いましばらくは経済的不況から抜けだせる予測が立ちません。

今回の新興感染症によって日本の医療の構造は大きく変化せざるを得ない状況に追い込まれており、これが地域医療の崩壊を招くリスクを極大化しております。2025年に向けた地域医療構想の実現や2040年にかけての人口減少社会に向けた一層の取り組みを強化すべきではありますが、そのためにもまずはこの

COVID-19 拡大による医療崩壊の危機を乗り越える方策を実行できる予算が必要
であります。

四病院団体協議会は令和5年度において特に別紙の予算措置を要望いたします。

(別 紙)

I 新型コロナウイルス感染症対策関連

1 感染防護用品、衛生用品等の確保

N95 マスク・防護服・ガウン・手袋や消毒液などの感染防護用品、衛生用品の不足が恒常化しており、早急な解消が望まれる。

こうした世界的規模のパンデミック発生時においても、感染防護用品、衛生用品等を安定して確保できるよう、国内企業による生産増強に対する財政的補助を要望する。

2 医療従事者への感染リスクへの対応

感染リスクを負いながら、医療現場において新型コロナウイルス感染症患者に対応している医療従事者に対し、感染防止の取組への診療報酬上の評価や感染した場合の補償につき、十分な財政的補助を要望する。

併せて、医療従事者の感染に伴い、その家族に感染が及んだ際の補償についても要望する。

3 医療機関の経営破綻の防止

新型コロナウイルス感染症の拡大により、外来・入院共に大幅に患者数が再び減少しており、病院の財政状態の悪化が懸念されている。特に、クラスターが発生した医療機関は、院内での感染拡大等により医療提供体制が整えられない結果、財政状況が急激に悪化することとなる。

また、コロナ病床を一般病床に戻したとしても、すぐに通常通りに戻るわけではない。

こうした医療機関の経営破綻を防ぎ、医療提供体制を維持・確保するための財政的補助を継続することを要望する。

さらに、入院医療に対する補助だけでなく、院内感染が発生したことにより、外来診療の休止・縮小を余儀なくされた医療機関に対する財政的補助を要望する。

4 緊急時の感染症対策基金等の創設

今回のような新たな感染症によるパンデミックが今後も起こりうることを想定し、緊急事態に対応できるよう、必要な時に柔軟性のある財政的支援（事後的な経費を支弁できる）が可能な基金等の創設を要望する。

また、医療コスト削減を行った諸外国において医療崩壊が起きていることや、医療計画の記載事項に「新興感染症等の感染拡大時における医療」が追加されたことを踏まえ、診療報酬の増加や、地域医療構想における病床の必要量（必要病床数）見直しを要望する。

5 都道府県による医療機関財政救済基金設立のための仕組みの創設

新型コロナウイルス感染症対策に関連する給付金・補助金により、医療機関の経営は持ちこたえている。また、福祉医療機構等による融資制度の拡充もあるが、据置期間経過後には返済が必要な借入であり、抜本的な解決には至らない。

そこで、都道府県による医療機関の財政救済基金の創設を要望する。地域の実情を把握している都道府県が、地域に必要な医療機関の救済を機動的に行うために、財政救済基金をその資金としてプールし、必要に応じて医療機関に資金拠出をする。医療機関は当該資金を、劣後債である基金として受け入れ、将来的に充実させた純資産額から基金を返済し同額の代替基金を計上する。これにより、医療機関の経営の基盤となる純資産を毀損することなく、医療機関の経営基盤の確立に寄与することが可能となる。

II 国際紛争による世界的なインフレへの対応

1 ロシアによるウクライナ領内への軍事侵攻に起因する、世界的インフレに対する迅速な対応

本年2月24日に始まった、ロシアによるウクライナへの本格的な軍事侵攻

は、如何なる理由があっても許されるものではありません。

この紛争による世界情勢に与える影響は、政治、経済、エネルギー、環境、物流など、多方面にわたることが懸念されます。また、インフレによる物価上昇は深刻さを増すと思慮されます。

我が国は、原油、穀物など原材料の多くを海外からの輸入に頼っており、その価格高騰による影響は、医療機関も例外ではありません。

特に病院給食においては、小麦などの食材料費や光熱費の高騰、物流コストの上昇による価格への転嫁が今後予想されます。また、医療機関は診療報酬等の公定価格制度のもと運営しなければならず、他業種のように価格に転嫁できないため、経営への影響が大変危惧されます。

このような状況を踏まえ、政府による迅速かつ適切な予算措置を要望します。

Ⅲ 消費税関係

1 控除対象外消費税問題の解決までに要する予算措置

控除対象外消費税を抜本的に解決するためには、医療に係る消費税の非課税制度を見直し、原則課税に改めることも含めて、引き続き控除対象外消費税問題についての検討を進めてゆく必要がある。

検討のための具体的な方策として、実態調査や調査研究を行うための補助を要望する。

Ⅳ 働き方改革関係

1 医師の働き方改革に伴う医師確保に係る予算措置

今般の医師の働き方改革に伴い、医療機関は医師の健康を保つために改革を進めながら、地域医療を維持するため、さらなる医師の増員をしなければならなくなるのは明らかである。

については、地域医療の維持に伴う医師確保において、診療報酬以外に医師の
人件費に相当する部分への予算措置を要望する。

2 医師の働き方改革に伴うタスク・シフティング、タスク・シェアリングに 要する医療人材確保と育成に係る財政的補助

医療機関においては早くから、特定の手技を看護師に、服薬指導を薬剤師に、
診断書の素案作成を事務職に委ねるなどのタスク・シフティング(業務の移管)
が進められている。また、チーム医療によるタスク・シェアリング(業務の共
同化)の試みも実施されている。

今後の働き方改革において、医師の労働時間の短縮のために医療機関内の
マネジメント改革として、このような取組を一層推進させるためにも、医療
機関でのタスク・シフティング、タスク・シェアリングに必要な医療人材確
保と養成に係る財政的補助を要望する。

3 医療人材(介護・介助職員等)の処遇改善への予算確保

現在、医療ニーズの多様化、医師等の偏在などを背景として医療機関にお
ける医療従事者の確保が困難な中で、質の高い医療提供体制が求められてい
る。病院は入院期間の長短に関わらず、患者にとって診療を受けるだけでなく、
日常生活へ復帰するための準備の場でもあり、看護に加えて介護や介助
はその機能発揮になくてはならない存在であるのが現状である。

かかる状況において、医療人材の確保が困難な将来にも亘る状況を踏まえ、
介護職員の処遇改善における予算措置ならびに医療人材の処遇改善について
の予算確保とそれに伴う財政的支援を要望する。

4 ナースステーション、処置室、カンファレンスルーム、看護師等宿舎、院 内保育施設等の整備

ナースステーションや宿舎、院内保育施設等の整備を行うことで、勤務環
境の改善と福利厚生の実を図り、看護職員等の離職防止と安定的な雇用継
続につなげる事業への支援拡充を要望する。

5 仕事と家庭の両立支援の推進（看護職員等再就業支援事業）

育児・介護等により離職した医師、看護師等の復職への継続的な支援は、今後の働き手の減少を見据えると必須である。しかるに、一度離職した人材は、そのブランク期間ゆえに復帰をためらうことがしばしばである。したがって、働き手減少の将来へ向けて、積極的に研修等を実施している医療機関への支援を要望する。

6 医療従事者の育児休業に係る財政的補助

医療は、24時間365日の対応を求められる業種であり、限られた人数で勤務する医療従事者は、仕事と育児を両立させることが困難となって、離職に至るケースも多い。子育てと仕事の両立を支援し、離職防止や長期的に就業が可能な人材を確保することは、医療機関の存続を左右する重要課題である。したがって、育児休業やその後の職場復帰に係る財政的な支援を行うほか、医療従事者の育児休業中その職員の職務を行う育休等代替職員について、当該医療機関が臨時的に雇用した場合、代替職員の所要経費に係る補助を要望する。

さらに、医師の働き方改革すなわち医師の労働時間短縮が進むことになるなかで医療を支えていくためには、医療従事者が働きやすい医療現場を提供するために、院内保育所の整備とともに、地域における病児保育の整備充実を要望する。

7 病院における看護補助者（介護職）の処遇改善への予算措置

新型コロナウイルス感染症対応の最前線の現場で働いている看護、介護、保育などの方々の収入を増やすために、全世代型社会保障構築会議の下に公的価格評価検討委員会を設置し、公的価格の抜本的見直しを行うこととされている。病院においては、看護職からの指示の下、食事、清拭、排せつ、入浴、移動等の療養生活上の世話などについては、看護補助者（介護職）がその役割の多くを担っている。これらは、介護保険施設において介護職員が行う業務と何ら変わらない業務でありながら、現状では介護職への処遇改善は介護報酬により

行われており、病院で働く看護補助者（介護職）に対する処遇改善に係る仕組みはない。病院が地域医療を提供していく上で、看護補助者（介護職）は必要不可欠な職種である。しかしながら、現状では多くの病院が看護補助者（介護職）の確保に大変苦慮している。医療現場で働く看護補助者（介護職）の収入が増える仕組みを構築していくためにも、介護保険施設の介護職と同等の交付金による対応が不可欠である。については、看護補助者（介護職）の確保が困難な将来にも亘る状況を踏まえ、診療報酬以外での看護補助者（介護職）の処遇改善における予算措置を要望する。

V 医療従事者の能力向上関係

1 病院で働く医師の総合的診療能力開発支援事業

現在、医療機関は、地域に密着した診療活動の中で、少子高齢化という社会構造の変化や医療の持続性への不透明感等、病院を取り巻く環境が激変している状況を目の当たりにしている。そのような中、医療機関には従来とは異なる役割が求められており、高齢患者が著増する中で、臓器別にとられない幅広い診療、多様なアクセスを担保する診療、多職種からなるチーム医療のマネジメントが実践できる組織が求められている。現在、日本専門医機構で総合診療専門医の育成が進められているが、総合診療専門医が地域で活躍するには依然時間がかかる状況にある。

このような状況下で、我が国の超高齢社会・多死社会への対策の1つとして、病院における医師の総合的診療技能の向上は急務であり、については、総合的診療能力の獲得を促すキャリア支援事業を実施している病院団体に対して、経費補助を行う事を要望する。

VI 介護施設、介護従事者関係

1 外国人技能実習生受入れ事業への補助

平成 29 年 11 月「外国人の技能実習の適正な実施及び技能実習生の保護に関する法律」が施行、外国人技能実習制度の対象職種に介護職種が追加され、更に平成 31 年 4 月「出入国管理及び難民認定法及び法務省設置法の一部を改正する法律」が施行、人手不足が深刻な産業分野（介護分野を含む）において「特定技能」での新たな外国人材の受入れが可能となった。

これらを踏まえて幾つかの病院団体も技能実習生を受入れる監理団体及び 1 号特定技能外国人（以下、「特定技能」と呼称）を受入れる登録支援機関として許可を受けている。この間、技能実習生においては既に来日し病院において実習を開始継続中、この他技能実習修了後を見据え、同実習を修了後に在留資格を変更し特定技能として再就労を希望する者も出てきている。

については、技能実習生等の受入れ、教育、生活面の指導、支援、管理等については、日本人職員を指導等するよりも現場の病院職員に多大な負担が掛かっていることから、受入れ病院（実習実施者）に対する財政的支援を要望する。

2 ケアマネージャー（介護支援専門員）の処遇改善

高齢者の増加に伴い、医療・介護連携の推進のため、居宅や高齢者支援センターに従事するケアマネージャーの育成と確保が急務である。介護従事者がケアマネージャーにスキルアップし、ケアマネージャーとして従事する道筋が大事である。しかしながら、介護士支援金により、介護士のまま勤務する方の収入が多く、ケアマネージャーの業務に携わる道筋が閉ざされ、大きな障害となっている。

ケアマネージャーにも相当の介護士同等の支援金が必要である。

VII 地域医療介護総合確保基金関係

1 地域医療介護総合確保基金の十分な財源確保と公私の隔たりない配分

医療介護総合確保推進法に基づき各都道府県に設置された地域医療介護総合確保基金に、消費税率10%への引上げによる増収額を基に十分な財源を確保するとともに、公私の隔たりなく適切な配分を行うことを要望する。

2 地域医療構想推進のための病床ダウンサイジング支援の充実

地域医療構想の実現を図る観点から、医療機関の病床ダウンサイジングや統合により病床を廃止する際、「令和2年度病床機能再編支援補助金」による「病床削減支援給付金」「医療機関統合支援給付金」「病院の債務整理に必要な借入資金に対する支援給付金」などの支援を、全額国庫負担により行うこととなっている。

こうした全額国庫負担による支援を今後も継続するとともに、柔軟・迅速な支給、及び実行に際して病床当たり十分な支援を行えるよう、増額を要望する。

併せて、休床や許可病床からの削減についても、地域医療構想の推進の観点から、何らかの国庫補助が行われることを要望する。

VIII 医療機関のDX関係

1 医療情報化支援基金による、電子カルテの標準化等にかかる初期導入経費への補助

医療分野においてもICTを積極的に活用し、効率的かつ質の高い医療提供体制の構築として、平成31年度予算において、医療情報化支援基金が創設された。その対象事業として、電子カルテの標準化に向けた医療機関の電子カルテシステム等を導入の支援などが記されている。健康・医療・介護情報利活用検討会ははじめ関連検討会での審議結果待ちとは認識するものの、その措置の確実な実施に加えて医療機関における初期導入経費への補助金を要望する。

2 病院のサイバーセキュリティ対策への公的補助金の支給

昨今、複数の病院で電子カルテ等のシステムがランサムウェアに感染し、診療が大幅に制限される事態が発生している。一方、このような事態に対して内閣サイバーセキュリティセンター（NISC）は医療機関に一定水準以上のセキュリティ対策を求めているが、そもそも医療機関が持つ患者情報などは国民全体の財産であり、それにかかる費用をただでさえ厳しい経営状況の医療機関側が負担することは極めて困難である。

医療分野における ICT の利活用は国が推進してきた政策であり、医療機関のサイバーセキュリティ対策に関しても国が費用面での措置を講ずるべきであり、公的な補助金などの支給を要望する。

3 医療人材資源を補完する ICT・AI等の導入への財政的補助

少子高齢化社会に向けて、医療現場においても働き手の減少が現実に取りつつある。人的資源を援助し、個々の生産性を向上させるには、ICTやAIの活用は必須である。すでに導入例がみられるものの、まだ少数である。医療全般に亘って、これらの技術を活用するための予算措置を要望する。

4 オンライン資格認証の補助金拡充の延長

令和3年3月からオンライン資格確認制度が開始され、同年3月末までに顔認証付きカードリーダーを申し込んだ医療機関・薬局に対して、レセコン改修等の補助として、事業額（病院で3台導入の場合190.3万円が上限）の実費補助がなされることになっているが、同日以降の申し込みについては、事業額実費の1/2を補助することとなる。

病院でレセコンの改修を行う場合、その費用は190.3万円の上限金額に収まらない。また、新型コロナウイルス感染症の拡大に伴い、受付業務等の導線の見直しが必要となるオンライン資格確認等システムの申し込みが、令和3年3月末日までに行うことができなかった医療機関も数多くある。

医療機関への導入を促進するため、導入に際し想定される費用について項目の細分化を行い、各項目について実勢に基づく標準費用を設定し事業額の上限

とするとともに、令和3年4月以降に顔認証付きカードリーダーを申し込んだ医療機関に対しても、事業額実費の全額を補助することを要望する。

5 地域医療充実のためのオンライン（遠隔）診療補助

新型コロナウイルス感染症による感染防止対策としても有効であり、また専門医が不足している地域ではとくに重要である遠隔医療は、医療の安全や永続性が担保された安定したシステムとして地域医療充実にきわめて有用であり、オンライン（遠隔）診療等、環境整備を充実させるための財政的補助を要望する。

IX 社会の国際化等への医療の対応関係

1 外国人患者の受入れ体制の整備

新型コロナウイルス感染症に対して採られている厳しい水際対策については、国内外の感染状況を勘案して、緩和の方針が採られつつある。またそう遠くない時点での感染収束の時期が到来すると想定される。その暁には、一時の外国人観光旅行客の増大も大いに予想される。そのときに備え、医療機関において外国人患者に適切に対応するための人材（外国人向け医療コーディネーター、医療通訳の配置、神奈川県で実施されている外国語通訳サービスを全国に拡大、在留外国人の国別人数に相応しい公的外国語通訳センターの設置を行い、外国人への医療サービスの提供が円滑に出来る仕組みの創設）や設備等で外国人患者受入れ体制を整備する医療機関への支援拡充を要望する。

2 キャッシュレス決済等の多様な決済手段の整備

現金以外の多様な決済手段の整備として、キャッシュレス決済が可能な体制整備が求められている。

クレジットカードに限らず、交通系ICカードやデビットカードあるいはス

マホ決済など、多様な決済手段に対応するために必要な収納管理システムの改修費用等への財政的補助を要望する。

また、クレジットカード利用に伴う決済手数料等のコストは医療機関にとって大きな負担である。キャッシュレス決済をより普及させるためには、クレジットカードを発行する信販会社に対して保険医療機関・保険薬局が負担する手数料について一定の財政的補助を設ける、あるいは、同手数料率に上限規制を設ける等の施策が必要である。

3 治療と仕事の両立

がん患者、難病患者、若年性認知症患者等について、治療と仕事の両立を図るために、医療機関が両立支援の相談体制を整える等のサポート体制の構築は必須である。

平成30年度診療報酬改定では、がん患者については治療と仕事の両立に向けた支援策が講じられ（療養・就労両立支援指導管理料、相談体制充実加算）、令和2年度改定では脳卒中、肝疾患、難病が対象疾患として追加されたが、今後も支援手段を診療報酬に限定せず、がん患者以外にも若年性認知症患者等の幅広い層を対象として予算措置を講じる事を要望する。

X 障害保健福祉関係

1 精神保健指定医の業務を評価し、以下の精神保健福祉法に基づく以下の業務に対する報酬に充てるための予算措置を要望する。

精神保健指定医の業務は多岐に亘り、医学・法律両面から高度で専門性を有するものである。それらに対する対価は、診療報酬としてはなく費用弁償として行われている。このため、一般的な医師の時給と比較しても低額となっている。これらの業務に対する正当な評価を行うための予算計上を要望する。

2 「精神障害にも対応した地域包括ケアシステムの構築」に関連する予算の充実を要望する。

精神障害にも対応した地域包括ケアシステム構築を促進するために、以下の予算を要望する。

(1) 普及啓発に関して

精神疾患や精神障害に関する普及啓発を推進することは、本システムの構築において、最も重要な要素のひとつである。日常生活圏である基礎自治体における取組みを促進するための国としての財政的支援の充実を要望する。

(2) 精神科救急医療体制整備に関して

精神科救急医療体制の整備を図ることは、精神障害を有する方等を含めた地域住民を支える重要な基盤のひとつである。その観点から、本システムにおける精神科救急医療体制は、従来の精神科救急医療体制整備事業の枠組みを超えて、より充実した体制整備の必要がある。

(3) 住まいの確保と居住支援の充実に関して

本システムを推進するにあたって、住まいの確保をはじめとする居住支援体制の構築は重要である。精神障害を有する方等が、地域で安心して暮らすことができる地域の基盤整備のための予算拡充を要望する。

(4) 地域における精神保健相談に従事する人材の確保に関して

本システムにおいては、精神保健相談業務は市町村が担当することとなっている。各市町村において、こうした専門性を持った人材を確保することは容易ではない。一方、各地域に展開する民間精神科病院においては、こうした人材を活用して多職種チームによるケースマネジメントを行っている。市町村の委託業務として、民間精神科病院を活用して精神保健相談業務を行えるような予算措置を要望する。

XI 災害対策関係

1 災害派遣精神医療チーム (DPAT) 整備費の新設

災害派遣精神医療チーム (DPAT) については、内閣府の防災基本計画において、その整備が求められている。多くの民間精神科病院においては、求めに応

じて DPAT に参加している。一方、DPAT に関する資機材の整備は、民間精神科病院が自身の負担によって賄っているのが現状である。都道府県が指定する DPAT を有する精神科病院に対しては、DPAT 資機材整備に関する補助事業の新設を要望する。

2 災害拠点精神科病院設備整備事業の拡充

災害拠点精神科病院は、都道府県における災害時の精神科医療を確保するうえで中心的な役割を担う拠点として位置づけられている。このため万一の発災に備えて、より一層の整備拡充が求められている。災害拠点精神科病院設備整備事業の拡充を要望する。

3 災害派遣精神医療チーム（DPAT）事務局事業費予算の拡充

災害派遣精神医療チーム（DPAT）事務局に対しては、都道府県 DPAT チームに対する研修の実施、災害時の休日昼夜を分かたない情報収集、更には最近の新型コロナ感染症でのクラスター発生病院への援助等、多岐に亘る業務継続が求められており、事務局機能の拡充が必至である。このため、DPAT 事務局事業費の拡充を要望する。

4 震災及び火災時等に備えた医療機関の非常用設備の保守・整備に係る経費に対する財政的支援

建築基準法の定期報告制度の改正による防火設備の点検の追加、消防法改正による自家発電設備の点検方法が追加され、非常用設備の保守費が年々増加しており医療機関の経営を圧迫している。定期的に発生するこれらの多大な費用によって医療機関の負担は増える一方である。全ての医療機関は災害時等において必要不可欠である社会インフラであり、その診療機能を継続させていくためにも、防災設備や自家発電設備等の非常用設備の保守費に関して継続的な財政的支援を要望する。

5 病院の耐震化対応のための補強工事や建替えに対する財政的支援

すべての病院は災害発生時に被災した方々を救うための社会インフラであるため、災害発生時に診療機能を十分に発揮できるよう、耐震対策を進める必要がある。

しかし、耐震改修には多額の資金が必要であり、それを調達できない病院が多いことから、病院全体の耐震化率は77.3%に止まっている（令和2年9月現在）。震度6強程度の地震により倒壊、崩壊する危険性が高いIs値0.3未満の病院も相当数存在する。

今後予想される南海トラフ地震等の大震災に一刻も早く備えるためには、耐震化率の引上げが急務である。

そこで耐震対策緊急促進事業（国土交通省補助事業）の枠をさらに拡大し、耐震改修促進法による「要緊急安全確認大規模建築物」に該当する病院については、工事等に必要な資金の1/2以上を金額限度なしに補助する予算措置を要望する。

厚労省の補助金・交付金による医療施設耐震化促進事業や医療施設等耐震整備事業の拡大、災害拠点病院や救命救急センター、病院群輪番制病院等に限らず広く病院一般の耐震診断、耐震改修への支援措置を求める。

また、スプリンクラー、火災通報装置、防火扉等の設置、非常用発電の地上化への助成を要望する。

6 震災・火災・水害等の災害からの復旧・復興への継続的な支援及び適時適切な支援を実施するための仕組み作りに関する予算の確保

平成28年熊本地震をはじめ、近年、平成30年7月豪雨や、平成30年北海道胆振地方中東部を震源とする地震、令和元年台風第19号等、大規模な自然災害が頻発しており、各地で大きな被害が発生している。

まず、現状回復にかかる費用については、医療施設等災害復旧費補助金があるが、この補助金はあくまで復旧に要する費用に対してのものであり、恒久対策には他の補助金を含めて一切の補助制度がない。災害を経て必要と思われる止水設備設置、非常用電源用給油タンクの強靱化や液体酸素設備の防水対策な

どの防災施設の設置に伴う増改築工事についても補助の対象とするよう制度の新設或いは現行補助金の補助対象の拡大を要望する。

また、災害が発生したとしても、急激に増加する可能性がある各種医療が円滑に提供できるよう、災害拠点医療機関以外の医療機関においても、あらかじめ病院の立地についてアセスメントを行う経費、その結果に基づく防災対策に必要な費用、更には場合によってはより安全な地点への移転あるいは、建て替えの際の嵩上げ等に必要な費用等に関する新たな補助制度を創設するよう要望する。

さらに、被災地の復興には長期にわたりきめ細かな支援が必要なことから、「被災地における心のケア支援体制の整備」「被災者に対する見守り・相談体制等の推進」等の事業について、引き続き財源の確保、事業の継続を要望する。

また、災害に際して公私の隔たりのない支援を行う仕組みづくりのための財源確保を、併せて要望する。

XII 調査研究関係

1 病院給食に関する抜本的な構造の転換に係る研究のための財政的支援

今日の病院給食は、病院における調理師確保の慢性的困難による人員不足と、近年の材料費・委託費の増加に伴う収支の悪化（さらにはロシア・ウクライナ戦争の影響による経済的負担は医療界でも多方面において生じ始めている）という問題を抱えている。なお、病院給食の収支の悪化は、厚生労働省が示したデータを見ても、入院時食事療養費が1日単位から1食単位に変更になった平成18年頃から加速している。さらに、働き方改革の推進に伴い病院給食業務についても対応が求められている。病院給食業務に係る作業内容の見直し、院内で取り扱う食種の集約、セントラルキッチン方式や急速冷却調理・加工機を使用する新調理システムの導入などが求められるが、長期的な視野に立って病院給食の持続可能性を考慮した際、それらの対応だけでは必ずしも十分とは言えない。当該業務に係る事情は首都圏や首都圏周辺、

地方都市、中山間地域や離島など全国各地で異なると予測されることから、まずは実態調査を行い、各病院で取り組んでいる画期的な改善策の収集・共有を進め、それぞれの地域事情等を考慮した対策の検討が必要である。

については、病院給食に関する抜本的な構造の転換に係る研究のための補助を要望する。

2 病院業務に係るタイムスタディ調査

病院は外来・検査・手術・入院といった様々な診療機能を有しており、入院センター・給食（栄養）部門・医事部門・経理部門・用度部門など間接部署も多岐にわたる。

たとえば、「初診患者（紹介状なし、紹介状あり）の初回来院時にどのような職種がどれだけの時間（人件費）をかけて対応しているのか」「入院前支援のためにどのような職種がどれだけの時間（人件費）をかけて対応しているのか」といった複数の事例について、業務フローを整理し、効率的な業務のあり方を検討することは、医師をはじめとする働き方改革への基礎資料ともなるものである。同時にこれらの業務に対する人件費の紐付けによるコスト構造を分析することも効率的な人員配置を考える上で有用であり、これらの調査研究のための補助を要望する。

3 新型コロナウイルス感染症対策に関する調査研究実施のための財政的支援

新型コロナウイルス感染症の流行は、医療界のみならず社会全体に大きな影響を与えており、その収束が見えない中、特に医療提供体制という観点から各地域で初めての経験を手探りの中で対応するという状況が続いている。

このような現状を受け、次の医療計画では5疾患6事業と新たな事業として新興感染症を記載事項として追加することが決まっている。しかしながら、各地域で異なる医療提供体制の上に成り立つ新興感染症対策については、丁寧で詳細な検証作業が不可欠である。

例えば、コロナ専用病院の設定と地域を挙げての支援など、今振り返ればこうすればよかった、ということを含めて、地域を幾つかの類型に整理した

上で、理想的な対策とその実現に向けての課題とその対策を示すことは、有事の地域医療提供体制の具体的なあり方を示す一助になると思料する。

については、第八・第九次医療計画策定に向け、新型コロナウイルス感染症対策の検証に関する研究のための補助を要望する。

XIII 医療分野の研究開発関係

1 医療分野の研究開発の促進

我が国の医療分野の研究開発を推進するには、研究開発にかかる研究者がそれぞれの職能を研鑽し、専門性を深化させるため、安定した研究環境を得ることが不可欠である。しかし、今般の新型コロナウイルス感染症に対する臨床研究や治験等の実施においては海外諸国に比べ、ワクチン開発をはじめとした対応に遅れが生じるなど、国際競争力が著しく低下してきている。

については、医学系研究に係る専門職種等の拡充に取り組むとともに、研究情報を国内外に発信できる人材を育成し、研究開発促進を図るための十分な予算措置を要望する。

XIV 環境への配慮

1 医療機関における省エネルギー設備投資に係る財政的補助

政府が掲げる 2050 年カーボンニュートラルの実現に向けて、医療機関の省エネルギー対策を強化・推進することが急務となっている。国や地方自治体が実施する補助・助成事業は様々なものがあるが、内容は複雑で、地方自治体毎に具体的内容が異なり、原則として年度またぎ事業が認められないなど、制度の使い勝手には改善余地が多い。医療機関の省エネルギー対策を促進するため、医療機関における高効率空調、高効率コージェネレーション、冷凍冷蔵設備、調光制御設備等の省エネルギー投資を対象とした国単位で統一された継続性

を持った補助事業の創設の充実を要望する。